海外協定校長期派遣留学報告書（日本語）　　（様式⑪）
A4，3～5 枚

学籍番号：48522013	氏名：宮﨑涼子
学部学科名：生命科学部分子生命化学科	
留学先学校名：慶北大学	

1. 留学の目的
幼い頃から韓国文化に興味があった。大学３回生になり始めて韓国に旅行した際、韓国独自の生活様式や韓国人の国民性が自分にとって非常に心地よく感じ、この国で学生生活を送ってみたいと強く感じた。また、大学入学後からは発酵食品などに興味を持ち始めた。日本以外にご飯がおいしく、かつ発酵食品などの研究が盛んな国を考えたときに韓国が最適だと考えた。慶北大学は、様々な国から留学生が来ているため、多様な言語が飛び交っている。このような環境に身を置くことで、韓国語,英語といった語学力の向上だけでなく、多文化理解を深め、価値観を広げることを期待できると考え、留学を決意した。

2. 現地での生活について
（住居、キャンパス、友達との交流、余暇の過ごし方など）
住居：２学期続けて校内にある寮で生活していた。校内には寮が複数あり、自分は学生数が最も多い寮だった。入寮する際は、布団を現地で調達する必要があるため、バディと一緒に大邱の中心地に買いに行った。ルームメイトは同じく交換留学で来ている日本人の学生だった。コンビニエンスストア,カフェ,ジムなど設備は充実しており、食事に関しては、ビュッフェ形式で好きな分だけよそうことができる。食事のプランは人それぞれだが、口に合わなかったり、特に１学期が始まった３月は交友関係を深めるため、友人と外食したりする機会が多いので、０～１食のプランが最適である。韓国といえば冬の寒さが厳しいイメージがあるが、大邱も大気が冷たいため、かさばってしまうとしても冬服はいくつか必要である。ただ、部屋の中は暖かく過ごしやすい。洗濯に関しては、無料ではなく毎回 1,000 ウォンかかる。寮に住んでいる他の学生が授業に行く時間帯に洗濯しに行くと待たなくてよい。
キャンパス：慶北大学のキャンパスは、国内にある大学の中でもかなり大きいキャンパスである。自然が多く、キャンパス内で散歩やランニングしている市民の方もよく見かける。春には桜、秋には紅葉がきれいで、四季の移り変わりを楽しむことができる。特に、噴水や並木道は学生に人気の場所である。キャンパス内には、24 時間営業のコンビニエンスストアが多く、試験期間には学生がよく夜食にカップラーメンを食べている。キャンパスが広い分、食堂も豊富にあり、特に工学館学生食堂は、安く、おいしいためおすすめである。辛い物を食べられなくても、とんかつやビビンバなどもあるため、食に関しては心配する必要はなかった。しかし、キャンパスが広い分、教室移動が大変だった。学期が始まる前に実際に講義室に行ってみて、移動経路を確認するとよい。
友達との交流：留学を通して、様々な国籍を持つ友人ができた。日本人の学生、韓国人の学生、英語を話す留学生など、3 か国語を日常的に使っていた。理系の留学生は少なかったが、韓国語を学ぶ授業では留学生が多く、ここで友人をたくさんつくることができる。韓国人の学生は勤勉で、学外活動にも一生懸命取り組んでいるが、韓国に留学に来る留学生も真面目かつ行動力があり、ともに学習しながら良い

刺激を受けることができた。現地の学生とは日韓交流会やバディ制度を通じて出会う機会がある。日本のアニメは韓国の若者の間でも人気であり、それにより、簡単な日本語を話せる学生が多くいる。また、韓国の大学は卒業要件として TOEIC の点数が必要な学部があるため、英語を流暢に話す学生も多くいる。韓国語で会話がまだ難しい時期は、ほかの言語でもある程度会話ができるため、言語の壁を恐れず話しかけることができた。留学生対象の行事や部活動に参加すれば、年齢・国籍・専攻が異なる学生たちとさらに交流できる。
余暇の過ごし方：1 学期が終わり、夏休みに入った。夏休みにも夏期講習があるが、自分は参加せず、韓国語の学習をしたり、国内の様々なところに旅行したりした。大邱の夏といえば、「デフリカ（テグ＋アフリカ）」と称されるほど非常に暑く湿度が高いのが特徴的だ。その言葉通り、連日暑い日が続き、旅行に行く日以外は涼しい室内にいることが多かった。国内は KTX、日本でいう新幹線を利用すれば、ソウルは 2 時間、釜山は 1 時間以内に行くことが可能だ。日帰り旅行も可能である。特に大邱の近くには、新羅時代の古都で世界遺産が多い慶州、工業都市の蔚山、港湾都市の浦項など、魅力的な都市が多数ある。それぞれの都市に特徴があり、方言もあるため、韓国文化をより深く感じるには、様々な都市に実際行き比較するのも良い。2 学期が始まりすぐチュソクという、先祖に感謝を捧げる韓国の伝統的な祝日があり、１週間ほど休みがある。友人の家に招待してもらい、キムジャンという 1 年に 1 回の大量のキムチを漬け込む家庭行事に参加させていただいた。大量の白菜を用意して一つ一つ丁寧に漬けるのは、時間も体力も必要であった。今はキムジャンをせず、市販のキムチを買う家庭が多いにもかかわらず、非常に貴重な体験ができた。

3．留学を通じて学んだこと
留学を通じて 2 つのことを学んだ。1 つ目は、言語の壁を恐れないことである。留学前は自分の語学力に自信がなく、恥ずかしがっていた。しかし、慶北大学で様々な学生を見て、交友関係を広くするには語学力が必要なのは言うまでもないが、それ以上に語学力が十分でなくても臆せずに行動し、積極的にコミュニケーションを取ろうする姿勢が不可欠であると感じた。実際会話の中で、文法や語彙が不十分であっても、相手はそれを気にすることは少なく、意思疎通を図ろうとする姿勢を温かく受け止めてくれる場面が多かった。留学中は、いろいろな場所に自分から出向き、会話の機会を増やすことで、授業で学んだことを実践的に使う回数が増え、結果として語学力の向上にもつながった。2 つ目は、“get out of your comfort zone”だ。居心地の良い場所から抜け出す・慣れた環境を離れるという意味の言葉である。留学中この言葉の大切さを身をもって感じた。慶北大学では、様々なバックグラウンドを持つ学生が集まる。韓国も少々文化の違いを感じたが、日本から離れている国はより大きい文化の違いがあった。特に、欧米の学生は、授業中も発言が多く、教授ともよくコミュニケーションを取っている。国籍が違う学生とも遊びに行ったり、いくつものコミュニティに所属していた。対して日本の学生は、日本人同士で集まっていた。留学は不安なことや寂しくなることも多いため、同じ国籍のコミュニティなど、自分の安心できる環境にいたいと思うが、自分自身を成長させるためには、母国の文化や他人の価値観にとらわれず、欧米の学生のように、慣れない環境にも飛び込んでいくことが大事だと感じた。

海外協定校長期派遣留学報告書（日本語）　（様式⑪）

A4，3～5枚

4．留学経験を今後どのように活かしていきたいか

今回の留学は、進路の選択肢をさらに広げる機会となった。韓国での生活もかなり慣れ親しみ、留学前は会話も難しかった韓国語も、今はTOPIK5級を取得した。そのため、元々就職の予定だったが、韓国の大学院を目指すことにした。これまでの学習では、化学や生物学における基礎的な原理や理論を中心に学んできた。しかし、留学中に環境生態学などの講義を履修し学びを深める中で、それらの知識をどのように実社会で活かし、特に環境問題などの社会的課題の解決に結びつけることができるのかに関心を持つようになった。そのため、応用化学や化学工学、生物工学を学び、環境問題の解決に関する研究に取り組んでいきたい。